

中国南京、湖南における日本語教育事情
—2006 年夏・中国における日本語教育の視察から—

Japanese Language Teaching in Nanjin, Funan China:
Introducing of Research on Japanese Language Teaching
in China (Summer 2006)

田 中 寛
TANAKA Hiroshi

0. はじめに

中国では現在、日本語教育に対する需要が急速に増え、さまざまな教学の改革が行われている。筆者はその現況をじかに見聞し、あわせて学習者の関心をできるだけ正確に把握することを目的に 2006 年 9 月に二週間という短期間ながら、教育事情視察および授業講演を行った。現在、両国の大学間で種々の国際交流が進められているものの、その中身や実際の進め方についても不明瞭な部分が少なくない。今回の報告はそうした日本と中国の大学間の協力・協定に向けて何が問われているかを個人的な関心から調査・見聞したものである。

日程と行事は以下の通りである。

9 月 3 日成田出発 (MU272 便)、上海到着、汽車で南京に移動、夕刻南京に到着。東南大学の榴園賓館に宿泊。外国語学院副主任徐福敏教授、同周琛講師と会食。日程打ち合わせ。

9 月 4 日 午後 2 : 0 0 ~ 5 : 0 0 東南大学記念ホール

- ①文学精読 村上春樹「海辺のカフカ」を使った読解
- ②新聞読解 山崎ナオコーラ、日野原重明の連載コラム記事、計四本

夜、大学関係者との食事会、今後の交流協定についての意見交換。

9月5日 午後2:00～4:30 東南大学九龍湖キャンパス

③文法講義(1) 「文法研究と文型研究」

「心情の表出をあらわすモダリティ形式」

9月6日 午後2:00～4:30 同

④文法講義(2) 「格助詞の諸問題——二格とヲ格の交代性」

⑤文学精読 吉村昭「初夏」(短編小説)を使った読解

⑥文学精読 倉橋由美子「交換」(掌編小説)を使った読解

9月7日 市内参観(雨花台、中央病院跡地、閱江楼、煤炭港遇難同胞紀念碑、南京師範大学など訪問)

9月8日 14:20南京発(MU2725便)、長沙到着15:20 湖南大学集賢賓館に宿泊、関係者による歓迎食事会。

9月9日 市内参観(湖南省博物館、開福寺、天心閣、黄興広場、火宮殿など)。

9月10日 中国五岳の一つ、南岳衡山登山。

9月11日 湖南大学の院生、教員対象に授業・講演 外国語学院第3楼

①文法学講義 「文法研究と文型研究」「言語の分析と創造」

②文化学講義 「恥と隠蔽の言語学—日本言語文化論のかたへ—」

9月12日 湖南大学の院生、教員対象に授業・講演 外国語学院第3楼

③文法講義(1) 「格助詞の諸問題」「“きっかけ”をあらわす構文」

②文学精読(1) 「海辺のカフカ」(村上春樹)、「奔馬」(三島由紀夫)の最後の40章

夜、日本語学科教員との意見交換会

9月13日 湖南大学の院生、教員対象に授業 外国語学院第1楼

③文法講義(2) 「心情の表出をあらわすモダリティ形式」「否定文末形式」

③新聞読解 新聞記事、慣用句を中心に

夜、第二外国語日本語学習者のクラスを見学(中楼216号教室)

9月14日 湖南大学の学部生、院生、教員対象に授業 外国語学院第3楼

④文学精読(2) 「初夏」(吉村昭)、「交換」(倉橋由美子)

夜、張佩霞教授と意見交換

9月15日 岳陽楼、洞庭湖参観。

夜、日本語学科教員主催の歓送会

9月16日 8:20 長沙黄花空港発、上海経由(MU719便)で成田へ着。

なお、講義、授業で用いた教材はすべて筆者自身が準備した。

1. 読解の授業(1)——文学鑑賞、精読の授業について

今回は二箇所で行うことになったので、共通した教材を準備した。大きくは読解の指導と文法研究の授業であった。日本語学科の規模としては湖南大学の方が学生数も多く、学習者も多様であることから、各種教材を使用した。

日本語教育において日本文学をどう紹介するか、といったことは意外と難しい。そこにはどうしても扱う側の主観が作用する。何でも流行物を紹介すればよいというものでもない。中国における日本文学の紹介は康東元編『日本近・現代文学の中国語訳総覧』(勉誠出版2006)に詳しいが、それでも訳されていないものも少なくない。今後も増えていくと思われるが、作品の選定において一定の偏重は否めない。

今回あつかった吉村昭、倉橋由美子の作品は中国ではほとんど知られていない。康東元編によれば吉村昭は『漂流』が山東文芸出版社から1984年に出版されているだけである。倉橋由美子の作品は皆無であった。学生の中から日本文学についての情報を探ると、川端康成、芥川龍之介、夏目漱石、三島由紀夫、大江健三郎といった作家以外には赤川次郎や渡辺淳一、村上春樹、森村誠一、西村京太郎などの名前があげられたが、私にはいささか不満であった。だが、翻って教師もそうだが、日本の学生、院生が反対に中国の近現代文学をどこまで理解し、作品、作家を知っているというのだろう。こうした実感は想像はつくけれども、やはり当地で学生と意見を交換してみなければわからない。今回、用意したものは以下の作品である。

① 村上春樹『海辺のカフカ』の冒頭部分8頁相当。(講談社文庫2005)

② 吉村昭「初夏」(短編小説)の前半部分。(『炎のなかの休暇』新潮文庫 1981)

③ 三島由紀夫『奔馬』の最終章(第40章)(新潮文庫 1977)

④ 倉橋由美子「交換」全部(『倉橋由美子の怪奇掌編』新潮文庫 1985)

「海辺のカフカ」はすでに中国語訳もあり、林少華氏の訳によってほぼ村上作品の全編が中国語で読むことができる。中国でもっともよく読まれている日本の現代作家であるが、作品の意図についての深い検討はまだなされていない。学生たちの興味も現代感覚の共有、という一点に魅力を感じているらしい。そうした印象を実際に見聞し、体験してもらうべく選んだ作品である。確かに他の作品と比べると読みやすい印象を与えたが、一方で「主張が無い」「文学のテーマが感じられない」といった批評もいくつか聞かれた。

「初夏」は短編小説ですぐれた作品を遺した吉村昭の短編集に収録されたもので、戦後の日本社会の紹介という目的から取り上げた。小説は大きくは「体験」と「創作」に分けられるが、吉村昭の短編は自身の体験が軸になっていることを他の作品と比較して解説した。ことに戦後の日本の庶民生活の窮乏については関心が深まったようである。事象の観察の細かさ、日本語の表現性という点で、また違った印象を与えたことは収穫であった。

「奔馬」は賛否両論ある三島文学のなかでも思想的な背景をもった作品として意識的に今回採りあげたものである。まず戦後文学における三島由紀夫の文学史的な位置づけをしたのち、ライフワークである「豊饒の海」の執筆動機、モチーフなどについて、また全体の構成について述べ、第二巻の「奔馬」に登場する主人公についても解説した。時代背景など正確に把握できたかどうか不安であったが、三島文学の一側面に興味が高まれば、との思いであった。

「交換」は創意に充ちた短編で、構成も非常に分かりやすく面白く読めた。文学作品には時代的背景もさることながら、思想性、娯楽性などもあるので、その選択、組み合わせについては難しい側面がある。だが、今回の授業を通じて、日本の現代文学を紹介することによって、日本語、日本文化、日本人の発想様式に関心をもつきっかけになれば、との思いを強くした。参加者に聞くと、こ

うした文学の読解の授業は少ないので非常に新鮮に感じたということであった。機会があれば戦後文学についても講じてみたい。

文学作品ではほかに戦争の現実を違った角度から知るための作品として「夏の花」(原民喜)、「盲中国兵」(平林たい子)なども用意していったが、教員との確認でこれは省略することになった。

以下に講義を受けた学生による感想文を参考までに一部紹介する。(ほぼ原文のまま)

①「海辺のカフカ」について(院生2年 張静苑さん)

私は最初に村上先生の商品に出会ったのは高校二年の時だった。友達が「ノルウェーの森」を貸してくれた。それまでは接する機会もないし、日本関係のことにあまり興味を持ってなかった。それは初めて本格的に日本文学に接する時だともいえよう。そして一年後湖南大学の日本語学部の学生になるのも運命みたいである。

その本を読んだ時の感想はもう忘れてしまった。でも、その時以来ずっと村上先生の本を愛読して、中国語の訳本をある限り読んできた。なぜ好きなのかは自分でもよく分からない。読んでいるうちは落ち着いてきて、心が穏やかになる感じが好き。他には、たぶん独特なリズムと内容の奇異が魅力的のも一因かな。去年、はじめて日本語版のを読んだ。そして私は考えた。私が好きなのは林先生(筆者注:林少華)の訳したものなのか、村上先生が書いた原版なのかと。翻訳者は小説の神髄を掴もうとして翻訳したのだが、翻訳者が本当にそれを把握できるのかは私たちは原版を読まないと分からない。翻訳された作品は翻訳者自身の風格がついているかもしれない。

長編小説「ねじまき鳥クロニクル」などの中国語の訳本は分厚くて、林少華先生の書いた前書きには村上先生の履歴を紹介して、それも分厚くて本の十分の一を占めるほどで面白いと思う。その前書きから村上先生のことを大体知ることができるようになった。早稲田の卒業生がなぜジャズバーを経営したのか、ちょっと理解しにくい。名門大学の卒業生はやはり大手会社に入ったり大学で先生を担任したりするほうがいいじゃないかと思った。でも自分の好きなことを是非した

いという信念を持って生きる人間が羨ましい。写真を見ると、極平凡な人で、世界に大勢な読者を持っている人気作家とは全然見えない。小説の主人公も平凡といえば平凡だ。大体一人暮らしで一ヶ月間に一回床屋に行き、運動靴を履く。純粋な少年みたいな格好をしている。が、よく奇異な経験がある。ネズミと呼ばれる友達があり、羊男に出会ったり、完璧な耳をしている女性に出会ったり、女性の双児子とデートしたり、井戸の底に座って家を出る奥さんのことをなどを考えたりする。村上先生の経歴も豊富で世界の色々な国に行ったり色々な人に出会ったり。作家はやはり世界中のところを見回って経験してからいい小説が書けるようになるだろう。

「海辺のカフカ」で「僕」は家を出ようとした。カラスと呼ばれる少年は運命を「絶え間なく進行方向を変える局地的な砂嵐」に例えて「僕」に教えてくれた。運命から逃げようとしても逃げられない、「自分自身のことなんだ」から。このように地味な文字には哲理なものが滲んでいる。読んだら、分かりそうで分からない。たぶん、村上先生と同じくらいの年になると分かるだろう。小説全体に穏やかとともに哀傷な雰囲気漂っていると思う。曇りの天気の時感じにそっくり。だが、希望のような明るいものも見える。例えば「ノルウェーの森」に鈴子が死んだが、緑子がそばにいるなど。主人公はちょっと寂しいが、寂しい生活に反抗して、自分を楽しくするようにする。つまらない生活にも面白みが発見できて、楽に暮らしていくことに感心した。(略) 例えばホラー小説や探偵小説なら、そのはっきりした筋に沿って心が引かれながらスラスラ読んでいく。だが、村上先生の小説を読むと筋がはっきりしない場合が多いことに気付いた。読んだあとで振り返ってみると、なぜか内容は忘れてしまっていることが多い。好きなのにそんなことになってしまって、ちょっと恥ずかしい。

「海辺のカフカ」を去年読んだ。今それはどんな話なのかもうはっきり覚えていない。先生の配ったプリントを読んで、もう一度その本を読もうと思う。そしてずっと前から村上先生のことについて何かを書きたいと思っていたが、怠け者なので書かなかった。今回、先生のおかげで私は願望が叶えられて心から感謝します。まだまだ話したいことがあるが、時間がきついたのでここで終わら

なければならぬ。今後、何か感想があったら書き続けたいと思う。そして村上先生の作品が好きな人と交流して感想を分かち合いたいと思う。

中国では「非常村上」（とっても村上）という流行語さえある。こうした村上春樹熱は、しかし、日本の実際を知る手立てとはならない。むしろ、グローバル化、世界同時文化に身を委ねる、一種の擬似同化剤のようにさえ思えることがある。そして『挪威的森林』（村上文学の代表作『ノルウェイの森』）を例にとれば、もはや日本文学ではなく、その中国語の文体的特徴、作品理解などから見て、明らかに翻訳者である林少華の再創作であるとする見方は捨て切れない¹⁾。中国の読者もまた日本の文学を読んでいるのではなく、世界文学としての中国文学の可能性を読んでいるのかもしれない。

「いい作品というのは読者自身の経験を思い出させ、共鳴を起こすことができるものだと思う」（院生、沈非さん）と多くの学生が感じたように、現代の読者はその体験の近さで、自分自身にとっての分かりやすさで作品を選別しているように思われる。それが正しい向き合い方かどうか分からない。だから作品の「筋」も二次的なものになるのだろう。ここに書かれた日本の作家観が正しいのかどうか筆者は判断を留保したいのだが、少なくともこの学生は原作と翻訳の差異について非常によく考えている。筆者もまた文学鑑賞にあたってはできるだけ日本語の原文に接することを薦めた。

2. 読解の授業(2)——新聞記事を使った授業

教材は以下の通りである。いずれも朝日新聞の土曜日に連載されている読物で、社会、家庭問題などにも触れていることから、日本語の読解教材として使用可能と判断した。世代の異なる著者の表現、関心についても比較を試みた。

●「指先からソーダ」（山崎ナオコーラ）

作家は二十代半ば、内容は現代日常生活を若い世代の視点から綴ったもの。各編約950字。

①「悪い人間が雨を見る」朝日新聞 2006年8月19日掲載

②「中庭に向かって開く窓」朝日新聞 2006年8月26日掲載

①は地下鉄でふと耳にした乗客の会話のなかで「悪い人」とはどのような人間の事か、自分は悪い人間かどうか、など自問自答し、社会のなかの人間関係を考えさせる内容。

②は学生時代に勉強に疑問を抱いていた作者がある日の教師のひと言で、また大学のゼミで紹介された金子光晴の詩集によって生きる力を得て行ったという体験記である。

●「94歳・私の証 あるがまま行く」(日野原重明)

作者は現役の医者で現代社会、文化、生活の諸問題について綴ったもの。

各編約960字

①「小学生からの手紙を読んで」朝日新聞 2006年8月19日掲載

②「第二の国歌をつくろう」朝日新聞 2006年8月26日掲載

山崎ナオコーラの作品とは対照的に社会問題、教育問題などを体験的な視線から捉えている。世代の異なる日本人のものの見方、考え方を紹介しようという目論見で、これも二編とも面白く読めた。

①は「老い」に対する若い人の考え方、作者の考え方についての感想。時間と人生という大きなテーマでもあるが、小学生の率直な質問にこたえながら、時代を継承することの意味を問う深みのある文章である。ここでは日本と中国の核家族、家族のなかの対話などの問題を論じることができた。

②は国旗、国歌の問題で、社会的な問題として話題になることを説明すると、学生のなかからは意外な感想が持たれた。国歌のことを論じた文章では日本人がなぜ国旗掲揚、国歌斉唱に反対を唱えるひとがいるのか分からない、国民が国歌、国旗に敬意を表するのは当然のことではないか、という印象である。実はこの国歌、国旗をめぐるのは日本人の中でも感情の問題が少なくなく、複雑であることを述べてもまだ納得しがたい表情であった。こうした日本の現代社会の事情はほとんど中国人に伝わっていないのではないか、という印象を抱いた。日本語教師はただ日本語を教えるだけではだめで、こうした学生の意見、質問に対して、できるだけ簡潔にかつ客観的な説明ができなければならない。

東南大学のある男子学生は日本の国歌がいつどのようにして出来上がったのか、そして国民はこの歌詞をどう理解しようとしているのか、という質問を出してきたが、こうした点にも曖昧に答えていたのでは日本人の主体性が問われるところである。

二人の書き手の題材、内容の比較・検討は短い時間ではできなかったが、学生から出た質問では山崎ナオコーラの文章が普通体で、日野原重明の文章が丁寧体で書かれていたことから、文体の違いについての関心があった。中国語にはこうした文体の相違は見られないわけで、母語話者からは気づきにくい問題である。学校教育ではいつごろから使うのか、手紙ではどうなのか、といった言語生活の話題にまで及んで非常に有益であった。

3. 文法研究と日本語文化学の授業について

日本語学科の学生の中には、ただ日本語が上手になりたい、就職に役立てたいというだけの目的で入学する学生もいれば、何となく日本語学科に入ってしまったという消極派もいる。今回の東南大学、湖南大学の二箇所の講義・授業ではできるだけ日本語の仕組みに関心をもつと同時に日本語のなかに潜む言語文化、発想様式について理解が深まるような内容を準備した。文法研究についての講義内容は以下の通りである

- ① 文法研究と文型研究——日本語教育文法の立場から
- ② 格助詞の諸問題——ヲ格とニ格の交代性
- ③ “きっかけ”をあらわす構文について——副詞節の研究から
- ④ 否定文末形式——判断と評価の諸相
- ⑤ 心情の表出をあらわすモダリティ——命題の評価性をめぐって

おおまかに格助詞、複文の分析、文末叙述の諸問題という領域で、東南大学では時間の関係から①、②、④を、湖南大学では要望により①から⑤までの全部をあつかった。①では文法研究の方法として文型研究の課題を教育文法の立場から述べた。②では「親を頼る」「親に頼る」などを例にヲ格とニ格の交代性について解説したのち、「公園に集める」「公園で集める」などのニ格とテ格の間

題など格助詞全般に互って問題点を検証した。③では「Xをきっかけに」「Xがきっかけで」などの構文をあつかい、類義文型の研究手法について述べた。④は「Xでもない」「Xはずがない」などの否定文末形式を、⑤では「Xていられない」「Xてならない」「Xないでおけない」などの表出の形式を複文構造のなかで考察した。

なお、大学学部生、院生の卒業論文、修士論文の題目一覧を入手したいと思ったが、滞在中実現できなかった。現地教員の協力を得て、是非こうした資料を収集し、中国人日本語学習者の関心、傾向の一端を具体的に把握したいものと思う。

文法講義と読解講座が大きな柱であったが、今回、これに加えてもう一つの課題を取り入れた。それは双方にまたがる意識の涵養である。用意した話題、題材は以下の通りである。いずれも湖南大学で行われた。①は院生、教師を、②は学部生を対象としたものである。

①「言語の分析と創造——主体と対象の関係において——」

研究対象、観察対象としての言語の内実を筆者自身の研究方法、体験から解説し、これからの日本語の学習、研究に必要な姿勢、関心について述べた。また、創造としては文学表現を例に、日本人の表現姿勢、文化意識についても解説した。以下、目次のみを記す。

はじめに	言語体験、母語と外国語
言語の分析	出来事としても言語、主体と客体について 時間と空間
言語の記述	眼前と想像 言語の発想様式 言語行動 普遍と個別認識 記憶と記録
言語の創造	言語の四機能 主題と命題と場面 歴史認識について
言語の技法	接続と文末 連語という構造 複合辞という概念
言語の伝達	日本語における「公」と「私」 均質社会と非均質社会 言語の中の個人主義

②「恥と隠蔽の言語学——日本言語文化学を越えて——」

文法研究の合間に筆者が数年考えてきた日本言語文化学の試論で、日本語の

特有の言い回し、言語現象を十数例とりあげて解説を行った。日本語のあいまいさを観察する機会とした。学部学生にとってはやや難しい内容であったが、各種用法に潜む表現意図については、中国語と対照させるなど、関心を深める機会になったようである。

「～のです」の節度——新しいプライバシー感覚のあらわれ

「～じゃないですか」——問いかけ、それとも納得？

「～とか、たりして」——例示のなかの暗示

「～し、それと」——“並べ立て”と“取り立て”

「～していく・してくる」——気分的で浮草のような言い回し

「～とともに・と同時に」——並存する話者の論理

「だから・というか」——接続表現に見る自我の主張

「～うえで」——確認と遂行の間の空白

「危険ですから駆け込み乗車は…」——管理標語漬け大国日本

「～はずみに・拍子に・ところを」——瞬間的事態発生への固執 など。

4. 日本語学習者の日本意識、日本語意識

南京の東南大学は理工系を中心とする名門大学であるが、外国語学院の歴史自体はまだ新しい。日本語学科の学生は各学年35名前後、大学院の修士課程には各学年3、4名が在籍する。日本語教員は助教授が3名、講師が9名の構成である。教員は日本語学関係が専門のほか文化芸術、社会心理学といった専門もあり、日本の日本語学科の教員構成とはやや異なった印象を受けた。授業では南京航空航天大学の教員、国際学院の学生も聴講に参加した。なお、南京には南京大学、東南大学を双璧として約13の大学がある。

湖南大学外国語学院の日本語学科は各学年70名前後、修士課程は各学年20名前後である。日本語教員は現在、日本で留学・研修中の教員を含めると18名で、これに日本人教員が3名という大所帯である。教員のなかには日中関係史を専門とする歴史学の専門教員もいる。いずれの大学の教員も日本語学科の学部、院生の指導のほか、第二外国語としての日本語の授業も担当コマ数

担当している。また、民間企業等の委託による日本語の授業なども運営している。ちょうどこの時期は広州にある日本の自動車工場の研修生日本語集中クラスが行われていた。なお、長沙には湖南大学、湖南師範大学、中南大学、長沙大学、長沙理工大学等十数校があり、今後も増える見通しである。

院生の研究テーマとしては日中対照研究のほか、主語の省略、連体修飾の研究、数量詞の移動、接触場面のストラテジーなどの日本語学、日本語教育学のほか、日本の教育事情や翻訳理論などを専門とする学生もいて、指導も多方面に亙る様子が窺われた。

学生の日本語に対する意識はかつて私が二十数年前に湖南大学で教えていた頃と、大きく変わってきている。教科書も内容、スタイルともに向上し、さまざまな学習手段、学習ツールも多様化した。だが、それだけ学習者は均質化を求め、個性が感じられない、それぞれも強烈な目的指向が感じられない、ということを感じた。

日本語学科の学生は二年間もすればほぼ日常会話に支障のない会話力は身につく。だが、その後が目的喪失の感がある。そこから一步踏み込んで日本語の専門性、文法現象でも言語文化の世界でも踏み出せる学生が少ないという。自然に学習意欲が薄れて、何のために大学に入ったのか、分からないといった学生も目立つようである。彼らの多くは日系企業に就職し、上海かどこかの沿海都市に出たいとの希望を持っている。「セレブ」という感覚は若者の間で確実に育っているようだ。もちろん、日本への留学の希望を持っている学生も少なくないが、何を学ぶかはそれほど具体的に絞られているわけではない。こうした点を鑑みると、八十年代、日本語を学ぶ学生達は改革開放経済に向かって生き生きとして活力があった頃と対照的である²⁾。教科書にしても図書館から借りて、次の学生が待っているという状態であった。テープレコーダーも満足になかった。学生は早朝から朗読に励み、日本語に対する関心も旺盛であった。もっとも時代の変化にともなう学生の意識の変化は必然的で、言及するまでもないことだが、ネット社会を背景に目的が多様化し、逆に関心が希薄になっている点は日本と似たような状況ではないか、と考えさせられた。

学習方法もインターネットで日本の番組がダウンロードでき、日本語教師よりも「先端」的情報を仕入れて質問するという具合に、急速に変わってきた。日本の番組も「ゴク先」などの学園ドラマに人気があり、ともすると日本の学校は危険に充ちているとの誤解を植え付けたりする。忍者の映画を見ては、忍者の講習を受けに日本に行きたい、という真面目な学生もいる始末である。これは数年前に英国でも聞いた話だが、アニメやドラマで仕入れた日本情報といざ、日本に行ってから得る情報、環境とのギャップが大きく、どう対処していけばいいのか分からないといった状況も生じる可能性がある³⁾。

当地の大学で日本語を教える日本人教師の感想で興味深い体験談を聞くことができた。学年を経るごとに日本語に対する関心も変わっていき、また同時に日本人教師に対する接し方も変わってくるというものである。当初はストレートな物の話し方をしていたのが、高学年になると日本人らしさを身につけて間接的な表現を好むようになるという。これなどはやはりテレビ番組の影響などもあるのだろう。中にはテレビの日本人の台詞を教えて欲しいと希望する学生も多いらしく、日本への関心はそれはそれで高いのだが、一面的な気もしないでもない。

東南大学でも湖南大学でも耳にしたことがある。日本語学科の学生は就職すれば通訳として最少は重宝がられる。だが、通訳、翻訳の業務は不規則でもあり、しかも職業柄特殊な待遇により昇任、昇進が、難しいことが挙げられるというのだ。せっかく日本語を習得して仕事に活かしたくても将来の仕事の地位を思ったとき、そこに幾らかの不安が過ぎることも確かである。現在の日本語学科において学生を集めるのはさして困難ではないが、卒業後の進路を考えると、日本語のほかに専門的な知識、たとえば情報技術知識や文化事情的知識を身につけさせ、広範な視野を学生に身につけさせる必要がある。これはまた日本の大学の外国語学部の直面している課題と無縁のものではない。

5. 日本人教員の需要と役割

南京の東南大学では日本人教師が12年の長期にわたって授業を担当してき

た。ところが大学側がこの見直しを決定し、今後は2, 3年の幅で外国人教師を入替えるシステムに変わる見込みである。確かに一年ごとの更新で希望すれば複数年滞在できるわけだが、よほどの大学側への貢献は別として、数年で打ち切るのが妥当と筆者も考える。日本国内でも海外で日本語教育に従事したい人材が少なくないと思われるし、教師の効果的な交替は大学の教学の活性化にとっても必要なことである。

湖南大学では日本の国際協力事業団から専門家が一人、サイトを見て応募してきた教師が一人いたが、日本語学、日本語教育の専門家ではなく、日本語の授業、日本事情の授業が担当である。もうひとり交流大学の千葉大学の修士課程を終えたばかりの日本人が赴任していたが、本番の日本語教育は現地に来てからが実体験のようで、当地の事情に慣れるまでには時間が必要である。したがって、大学院生の論文指導では日本人教師はほとんど加われない状況で、研究発表会などの整備も合わせて課題を残しているように思われる。

長沙では日本人教師が40名ほどいると聞いた。大学、民間を合わせて相当数の日本語教育機関があることがわかる。筆者が二十年前にいたころは湖南大学に筆者一人、湘潭大学に二人教員がいただけで、隔世の感しきりである。

海外における日本人日本語教師がなすべきことは何か。それはしばしば日本語教育の本質とともに日本人がどう海外と向き合っていくかを内省する課題となる。北京や上海といった都市部ではなく、地方のどちらかといえばマイナーな地域で日本語教育に従事しようとする、自ずからそれぞれ個々の主体性、創意性が求められ、それだけに周囲の関心を集めることにもなる。日本人教師は日本語教師としてだけでなく日本人の代表として観察の対象となるのである。自分は自分のスタイルで、といった関心はよほどの時間を経なければ通用しないと考えたほうがよい。では、日本人教師は何をなすべきであろうか。中国をよく知る、関心をもった教師の場合は、それだけ好奇心が旺盛であろう。だが、日本語教育を職業とする人たちがすべて当該国に関心が深いかといえば、相応のバラツキがあることも事実であろう。多くの注文を附加すれば、赴任を希望する人材は限られてくる。当人にしてみれば気候、文化習慣などに慣れない場

合も起こり得る。そうすると、日本語教育は異文化接触の先端であるという気がしてくる。教えると同時に彼らから何を学ぶか、それに目覚めたとき、一定の交流が獲得されるのであろう。

一つの提言として。日本人教師は中国人教師がさまざまな制約で実行しにくい業務を請け負い代行することであろう。たとえば、研究会や読書会の実践などである。日本人教師が入り込むことによって、また違った教育方法が導入される可能性がある。また、学生にさまざまな研究・学習部会を発足させ、学生に自己発見、自学学習の積極性を身につけさせることである。この点も日本人教師がさまざまな課題を与えることで、新鮮な取り組みが期待できるのではないだろうか。研究会の会報も当初は手作りでもよい。それが積み重ねられていけば、日本語教育、日本語学に対する対外的な評価も向上するだろう。

現場の細かい点、深い事情を知らないまま、思うままに挙げてみたが、少しでも日本語への関心が高まる種を撒いてくれることを若い日本人教師に期待したいと思う。

6. 第二外国語としての日本語教育

湖南大学の特徴の一つとして、第二外国語としての日本語教育教材の開発に力をいれていることがあげられる。「普通高等教育“十五”国家級規格教材」と称される全国共通教材で、日本からも国際交流基金の援助によってすでに日本語学科の李姐莉教授を主編者として初級教材が開発された⁴⁾。

『日本語初級総合教程』 李姐莉主編 268p. 高等教育出版社 2004.4

『日本語初級総合教程学習補導書』 李姐莉主編 189p 高等教育出版社
2004.4

『日本語初級総合教程教学参考書』 李姐莉主編 189p 高等教育出版社
2004.4

続いて開発されたのが次の中級教材である。

『日本語中級総合教程』 李姐莉主編 268p. 高等教育出版社 2006.4

『日本語中級総合教程学習補導書』 李姐莉主編 189p 高等教育出版社

2006.4

学生用の教科書と同時に教授書、また関連項目を解説した補導書がセットになっており、従来型の教科書をモノクロ型とすればこれはデジタル型に一步近づいた画期的なものである。音声、画像にも優れ、学習者の日本への関心にうまく答える場面が満載されている。

これらを用いた授業を参観する機会があったが、スクリーンに映し出された画面、音響に日本語を学ぶ学生の視線は輝いていた。まったくの初心者を対象としたクラスであったが、三百人近い大教室で日本語の授業が行なわれているのだ。これは壮観であった。理工系大学という環境の事情もあるが、こうした教育機器の充実ぶりは日本よりも進んでいるのではないか、との印象も抱かされた。第二外国語の日本語授業はまた違った活気がある。ほかに専門を学習しているという背景もあるのだろう。ある意味で日本語教育の活性を推進しているといえよう。実務型の日本語教育の需要を痛感した次第であった。

7. 中国における「問題な日本語」

日本語の需要が増えるにしたがって、さまざまな日本語が日常生活で目にふれることになる。食品の包装にしても「潤喉糖」と書くよりも「ミントのど飴」と書いたほうが高級感も出るし、注目度が高くなる。しかしカタカナの「ミ」が漢字の「三」になったり、カタカナの「ン」が「ソ」になるなど誤表記は枚挙にいとまがない。平仮名にしても「こ」が「い」になったり、「し」と「こ」が「に」になったり、など中国人特有の癖が散見される。こうした表記の問題から始まって語彙表現、各種の構文的な問題など、日本語研究者にとっては格好の観察対象となるわけだが、ここではその一例を紹介したい。

長沙に湖南省ではじめての五星ホテルができた。以下に挙げるのはそのパンフレットに記載された中国語に併記された日本語の部分である。(下線部分が不自然な訳語。紙面の関係から中国語は省略、また固有名詞は伏字とした)

××国際ホテルのご光臨を歓迎いたします。

××国際ホテルは、湖南省に初めて国際五つ星の標準によって厳格に作られる超豪華なホテルです。長沙市の政治、経済及び文化センターに位置し、車で空港まで30分、汽車駅まで5分ほど、極便利と考えられます。

ホテルのキービルの高さは199.6メートル、全部で51階、建築の総面積は10万平米です。ビルの氣勢が広く、広場の色は豊か、内部装飾は極奇麗、設備は国際率先であります。××国際ホテルは文化芸術と現代科学の完璧結合、「湘礎第一ビル」（湘は湖南省、礎は湖北省の略する字）と認めています。「業種典範、国際一流」は××国際ホテルの執着追及である他、更に豊かな承諾です。ロビー：ロビーの設計はきわだって創意に満ち、装飾は豪華です。お泊ってから宮殿らしい豪華及び部屋の快適はあちこちに感じられ、周密で懇ろなサービスはいつも受けられています。

客室：450客室（中に86ほどの標準、豪華、デュプレックス、大使、大統領客室が含まれ）があり、風格はみやびで快適、環境は心地よく自由、「高所で名所を見尽くし、心がゆったりする」という特有な視覚感じがします。行政階は快適で便利、サービスはかゆいところに手が届きます。快速のチェックイン、チェックアウトサービス、完璧なビジネスサービス及び無料の朝食サービスなどにより、家に帰ったかのようなこころよさが感じられます。

飲食：風格の違うレストランとバーに、世界各地の経典美食と現地の特色料理、飲み物が集められています。各地軽食を集める「×××」飲食ストリート（24時間営業中）、精製伝統湘粵（潮州と広州を体表とする）料理とE淮揚（淮安と揚州を体表とする）料理も生ものと猛禽と海の珍味、正統湘菜（湖南省の料理）を持つ「鵬程食府」、高尚奥ゆかしい「玉堂春庁」、海外風格を満ち溢れる「×××」コーヒーバー、上品で審美的な「欖勝閣」クラブ、こちよく快適な「×××」ロビーのバー、運動レジャー「×××」バー及び位置高い「×××」クラブがあり、違う飲食雰囲気の別に美味しい料理の同じな享受がもらえます。24時間料理送付、いつもいっぱい立派な各種料理が提供されています。

会議・展覧：国際会議センターに同時通訳装置、自動投影機、活動舞台、先進的なビデオ照明設備と関連設備は十分に設けられています。四つの面積と風格

の違う会議室によって各種会議に対応できます。極立派な多機能庁に 1600 人の会議に合え、またごニースによって小さい会議室、展覧室と宴会室に分けられます。鵬程食府のロビーに格調が高い、構造が立派だから、親戚親友をごちそうするとかビジネスを相談するとかご満足に応じられるのです。

健康設備：規模は広く、機能は完璧、設備は一流です。ボーリング、卓球、ピンポン、テニス、運動、水泳とサウナーなどの設備によりお客様の各種要求に対応できるんです。

娯楽：娯楽について、精彩番組でお客様に一日間の生活をトップに挙げられます。51 室のカラオケボックス席にてお客様の自由に歌えるように行われます。碁類センタに将棋、碁、ブリッジ、トランプ、マージャンなどの娯楽が提供され、広いロビー及び豪華ボックス席はお客様に対して本当に友達集まりと娯楽のいい場所です。

他の設備：国際標準を持つビジネスセンターに設備は先進、仕事は速く、電話、ファクス、コピー、チケット、秘書、通訳・翻訳、ビジネス資料検索およびインターネットなどがサービスされています。「金色家族」(ゴールデン家族)世界名品センターに、欧米の正統ブランド物は集められています。「××国際ホテル」に、ビジネス相談と高級娯楽に高尚場所を提供しています。13000 平米のスーパービジネスビルに専門化管理と5 つスターの周到サービスが行われています。

日本語の不自然な部分はほとんどが中国語からの直訳である。同文同種の感覚は中国人にも当て嵌まる。文章作成者には漢字から想像され、イメージされる日本語に機械的に置き換えたことが考えられるが、ネイティブのチェックを受けていないことが最大の要因である。おそらく民間の翻訳サービス、あるいは日本語のできる関係者に委託して作成したものと思われる。筆者は上記訂正箇所をさっそく当ホテルに送付することにした。

学習者が増えればそれだけ日本語は身近にはなるが、ともすると正確さを損なう場合も少なくない。言語の学習はそれが外国語である以上、相応の時間と

習得の文化的プロセスを要する。さまざまな領域、業種で翻訳、通訳で行われる現実を考えた場合、こうした細かな齟齬がひいては大きな誤解に繋がっていく怖れもないとはいえない。こうした現場においても日本人教師の提言する余地があるか、と考えた次第であった。

8. 中国における日本語教育の諸問題

日本語教育の需要は非常に高いことが今回の訪問でも分かった。南京はとくに上海に近いこともあり、民間の学校も多いらしい。だが、教師の繁忙さも手伝って意見交換会、学会、研究会組織のようなものがなかなかできにくいと聞く。教師は教える仕事に追われ、研究論文を書く暇もない。資料も、発表の現場も少ない、といった具合である。

さらに、日本語教師は週に何コマもの授業をうけもち、出張などのスケジュールも突然変更になるなど不規則な業務日程もあり、校務も責任者になるほど激務の印象を受けた。日本語の需要が増えることは大学の経営自身にとっても有利なこととはいえ、このままでは日本語の学問的地位の向上にはたして貢献しうるのかどうか、といった疑問も率直に抱かれたのである。日本語教育に携わる教師たちは日中関係の基礎ともなる相互理解への橋梁の役目を果たしているのは明らかであるが、日本語を学び始めた若い世代がさらに日本の各方面に関心を持っていくには、これまで以上のカリキュラム、意識の改変が必要であろう。そうでなければ日本語学習の人口が増加しても単純に日本への理解が深まるとは思えないからである。

今回、ふたつの大学で授業を体験できたことは筆者にとって貴重な体験であった。日本人日本語教師が現地でどのような役割を果たせるのかを考える機会ともなった。そこで気がついたことは学習者の意識の変化である。大学進学率が高くなったこともあり、レベルの差、学習目的意識の格差、などが目立ち、平均的な数値がつかめない印象を受けた。授業時間の学生の集まり、出席状況についても変化が見られた。これには特別授業といっても受講科目を欠席して受けることはできず、当該時間に空いている学生、関心のある学生が受講の対

象となったが、そうすると出席者が限られてしまう。せつかく（筆者自身が言うのも気が引けるのだが）日本から特別授業で来ているのだから、強制的に出席を義務づけ、それを出席代わりにすれば、と提言したが、そうした措置はなかなかとりにくいのが現実である。この点については事前に何らかの交渉をすべきであったと反省した次第であった。

大学の外国語学院においては他言語学科との並存関係から日本語学科の位置付けは単純にはいかないだろうが、筆者の希望、期待を述べるならば、日本学センター、日中比較文学研究所、翻訳研究所などを設けながら、学生の専門性をさらに支援していく組織づくりが必要であろう。研究会、読書会などの運営がうまく立ち行かないのも日本人教師が時間をつくって工夫していけば、その必要性は大学当局からも評価の対象となると期待されるからである。日本語学研究の充実が進んでいけば、日本語を学ぶ学生の意識もまた変化していくだろう。こうした状況を考えるとき、日本側との情報、意見交換の機会が一層進むことを希望してやまない。

第二外国語として日本語を学ぶ学生に接して感じたことは、潜在的な日本語学習者の増加である。かれらは専門のほかにも実用的な日本語、教養としての語学を身につけようとしている。その活気は二十年前と変わらない新鮮な刺激を筆者に与えた。こういう学習者からも日本を理解する人材が多く輩出することを願うと同時に、どうすれば彼らの関心が支援できるかを考えていかなければならないと痛感した次第であった。

9. おわりに

筆者は1984年から1985年にかけて湖南大学で教鞭をとった。今回は二十二年ぶりの訪問で感慨も一入であった。大学は見違えるように立派になり、市街地は目を見張るほどの発展をとげていた。かつて湖南大学ですごした月日が夢のように感じられ、滞在中はタイムスリップしたような心境に陥った。変化は確実に感じられ、見聞された。

実際に中国の日本語教育の現場でどのようなことが行われているのか、日本

人教師と中国人教師の連携、学部生の指導、院生の指導など聞きたいこと、知りたいことは尽きなかったが、二週間の滞在とはいえ、収穫は決して少なくなかった。現在、国際交流を標榜して、さまざまな大学との交流が行われているし、これからも拡充しようとの動きが在る。だが、どれだけ現場を見て理解が深まっているのだろうか。筆者にははなはだ疑問に思われる。もっとお互いに現地の実情を知る必要があるのではないか。そうした思いを強くした今回の訪問授業であった。日本側がある種の特権的な意識をもって日本語を教えに行く時代はとっくに終わった。学生の意識にしても従来とはちがった感覚で学ぼうとしている。日本語教師として現地に赴く人たちは日本語を教えるという職務のほかにはいかに日本を伝達、紹介するか、という課題を強いられる。それはただ一面的な個人趣味的なものであってはならない。責任をもち、相互学習する熱意がなければならない。

日中間の政冷経熱が言われて久しい。そうした中で日本語教育の発展は両国の関係を築く貴重な絆の構築である。そうであるからこそ、その課題を双方が真摯に受け止めなければならない。現代社会が必要としている外国語のニーズに応えることは最優先であるが、十年先、さらにその先の長い関係維持に向けての意識も必要であろう。日本語教育に赴く日本人教師も現代中国に対する関心、理解が求められるのは言うまでもないし、さらに言語・文化教育に対する熱意、創意を必要とする。インターネットなどでは学べない日本語にこそ日本語教師の創意工夫が求められる。「賞味期限」ということが言われるが、いわば目の肥えた学習者にどのような魅力ある日本語教育、文化事情教育が提供できるのか、学習者の動向が係っているともしえよう。

日本語教育に関わる教師、研究者はその成果を還元すべく、また現地の需要を知るべく、もっとその国の学習者の教育・学習現場に入っていく必要がある。とくに中国については日本語学習者の多様化、急増からその意義を強く実感した次第であった。

湖南省では2006年11月に湖南省高等教育学会日本語専門委員会が設立される見通しである。会長は湖南大学名誉教授周炎輝氏、事務局は湖南大学である。

本委員会の設立によってさらに日本語学関係者、日本語教師の横の連携がはかられ、湖南省を起点とした華南江南地方の日本語教育の発展、さらには日本学センター、日本学研究所等設置の布石となることを祈念したい。筆者も微力ながら側面支援していきたいと考えている。

今回、昨年引き続き南京を再訪し、また二十年ぶりに湖南を訪問できたことは心に残る旅となった。当時、お世話になった恩師周炎輝先生はじめ諸先生との再会は何にも増して貴重な時間であった。中国の日本語学習者に実際に対面して、さまざまな教学上の体験を得ることができた。

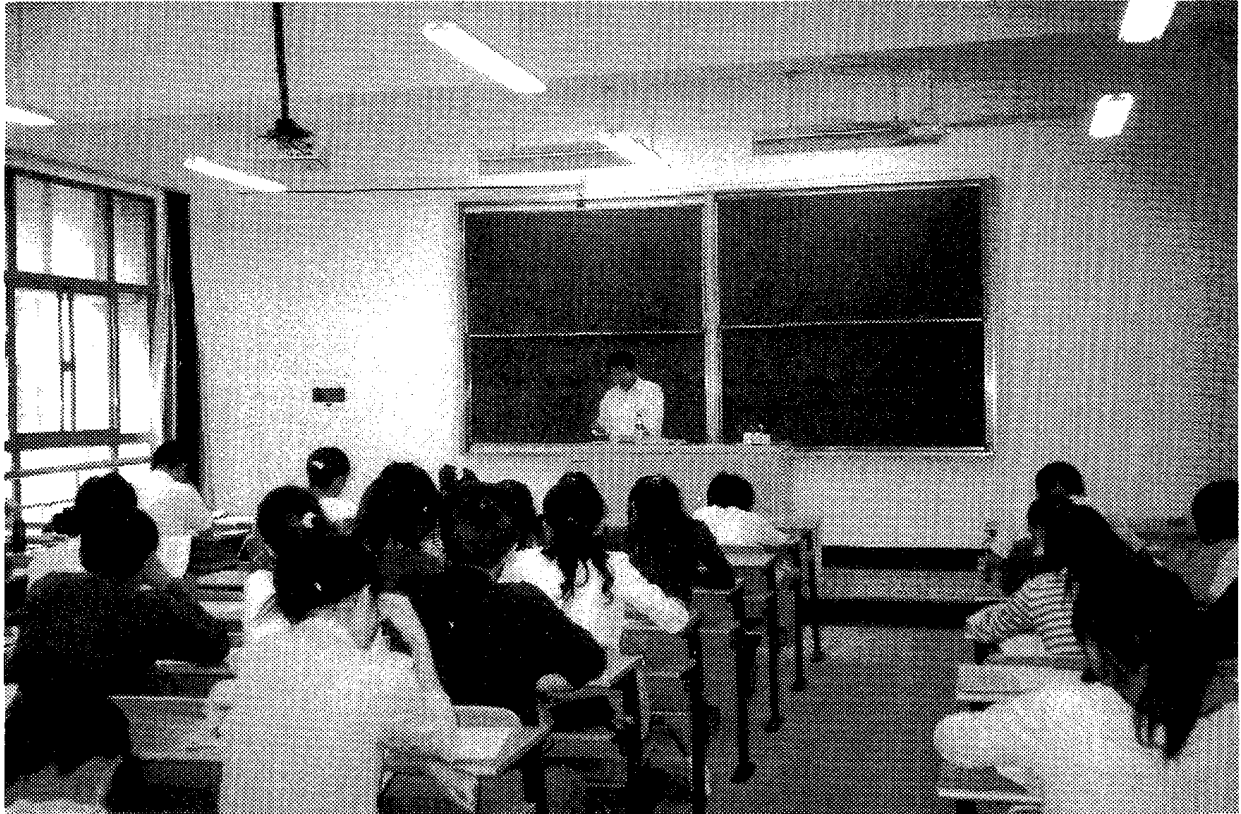
最後に、今回の滞在期間中、お世話いただいた南京・東南大学外国語学院の関係者一同、湖南大学外国語学院の関係者一同に、また授業、講演に参加してくれた学生の皆さんに心より感謝申し上げる。

注記

- 1) 園山延枝 (2005) 「中国に於ける村上春樹 (受容) —— 翻訳者林少華の評価を中心にした考察」『野草』第 76 号 中国文芸研究会 76-87pp。中国における村上春樹については、藤井省三『中国のなかの村上春樹』(『一冊の本』連載 2006-、朝日新聞社) を参照。また、中国人から見た村上春樹の作品評価については徐谷芄 (2006) 〈村上春樹與菲茨杰拉德——《挪威的森林》與《了不起的盖茨比》的比較——〉《華東師範大學學報 (哲學社會科學版)》Vol. 38, No. 3 118-124pp を参照。
- 2) 1980 年代の湖南大学における日本語教育については田中 (2001) などを参照。
- 3) 田中 (2006) の pp255-259 を参照。なお湖南の日本語教育事情については日本語学科張佩霞教授、同学科日本人講師の篠崎啓史先生から教示をうけた。記して感謝申し上げます。なお表現上不正確な点があるとすれば、筆者の責任である。
- 4) このプロジェクトについては李姐莉 (2004) を参照。

【参考文献】

- 田中寛 (2001) 『日本語の境界』(私家版)
- 田中寛 (2006) 『日本語学と日本語教育学のために』(私家版)
- 田中寛 (2007 予定) 「江南・華南游記——南京、長沙再訪の旅から」『大東文化大学紀要』第 45 号
- 李姐莉 (2005) 「大学非専攻日本語学習者のマルチメディア教材の利用状況をめぐって——湖南大学の実態調査を中心に——」『世界の日本語教育』15 国際交流基金国際日本語センター



① 南京・東南大学の日本語教室で



② 東南大学の新キャンパスにて



③ 湖南大学外国語学院日本語学科の学生、院生たちと



④ 軍事教練に励む新入生（湖南大学にて）